

## 珠洲窯の概要

大安 尚寿（珠洲市教育委員会）



珠洲窯は、基本的な製作技法（叩き成形、櫛目施文、還元焰焼成、窯形式など）は、須恵器系（東播系窯）の技法をとっているが、押印による装飾や器種・器形に、瓷器系（渥美・常滑窯）の影響も色濃い。創業に際して、その分布域と成立時期が若山荘にほぼ重なることから、荘内産業振興を意図した領主の関与があったと目されている。窯跡は、これまでに4支群12小群約40基が発見されている。

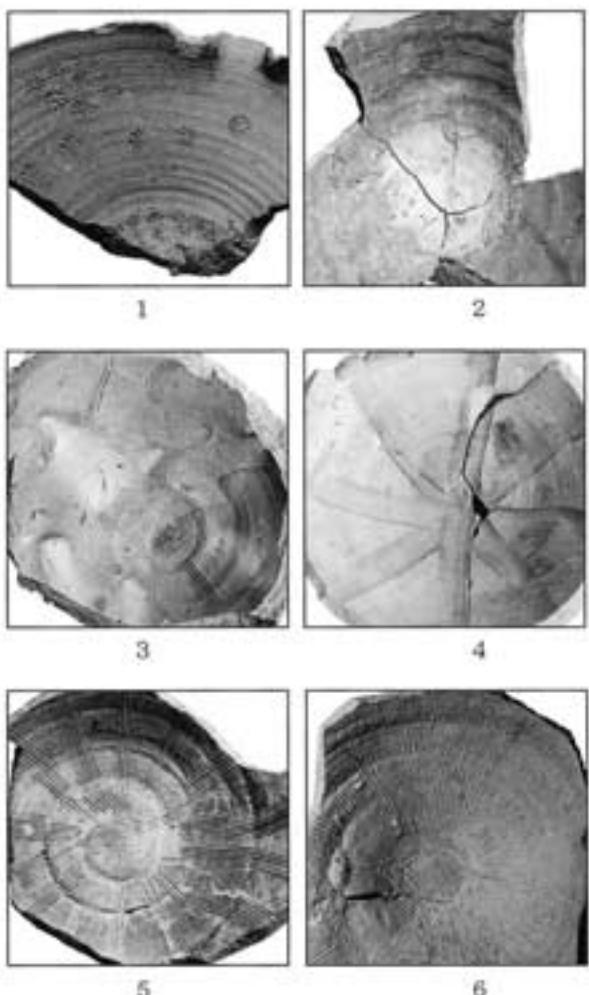
- ・三崎支群 寺家クロバタケ窯（三崎町寺家） 大屋ヒヤマ窯（三崎町大屋）
- ・馬縄支群 馬縄カメガタン窯（馬縄町）
- ・宝立支群 寺社カメワリ坂窯（上戸町寺社） 清水窯（上戸町寺社小字清水） 大畠窯（宝立町春日野小字大畠） 法住寺窯（宝立町春日野小字法住寺） 郷力マノマ工窯（宝立町柏原小字郷）  
西方寺窯（宝立町柏原小字西方寺） 鳥屋尾窯（宝立町柏原小字鳥屋尾）
- ・内浦支群 行延窯（鳳珠郡能登町行延） 河ヶ谷ミソメ窯（鳳珠郡能登町河ヶ谷）

窯本体の調査例は、寺家1～5号、大畠1・2号、法住寺3号、西方寺1号の9基のみだが、そこから知られた特徴は、温度ムラを防ぐため全長を10m程度に抑制し（Ⅶ期の西方寺1号窯は例外とする）かわりに幅を徐々に拡大した、すん胴型の窯体であった。また幅の拡大とともに器種の配列を工夫し甕を火前に、鉢を窯尻に置くことで、歩留まりの向上を図っている。この結果、Ⅰ期の寺家3号窯では、甕16・壺11・鉢13の計40個を窯詰めしたとみられるが、Ⅳ<sub>3</sub>期の大畠2号窯では、甕20・壺20・鉢70の計110個に増加したと復元された。これに歩留まりの向上を勘案すれば、1回の焼成で得られる製品は3倍以上に増加したと考えられる。13世紀を通して拡大を続け、14世紀に最大の流通圏を確保するに至った。しかしⅤ期には、甕の減産と越前窯を意識した研磨壺の増加に、衰退の兆候があらわれる。15世紀後半には、鉢への生産集約と粗造化が進行し、やがて廃窯へと至る。

珠洲窯は、吉岡康暢氏の精力的な研究によってその概要が明らかにされてきた。しかしながら多くの問題が山積し、その実像に迫るには極めて困難な状況にある。ひとつに、まず発見されている窯数と流通量の不釣合いがある。今後、窯跡が発見されたとしても100基程度と見込まれ、他の広域窯に比べてあまりに少ない。灰原出土陶片の編年観から各窯跡の使用年限を計算すると、1基あたり25年以上と類をみない長い耐用年数となる。それに比べて少ない灰原の堆積量から、焼成回数がそれほど多くなく（年2回程度）長期使用が可能だったと見ることもできる。製品の形状、特に編年の指標となる口縁形態がバラエティに富むという傾向が、生産・技術伝承が、専門化・組織化されていなかつたことを示唆すると考えれば、長期使用とも符合するが、絶対的な生産量の問題が残る。瓷器系の様式への強い志向を見せながら、なぜ須恵器系の製作技術を採用したのかという理由も、年間焼成回数の少なさから、技術習得の容易さ、失敗の少なさからという面があったとも考えられる。だが、東播系窯から直接的な技術伝習によって、そうした珠洲独特の様式を創業初期からなし得たとも考えにくい。

最後に、すり鉢の問題にふれておきたい。中世陶器の基本三種である片口鉢は、珠洲窯のオリジナルでないことは言うまでもないが、卸し目施入に関しては他産地に先行し普及すると考えられている。櫛目が須恵器の伝統的施文法であるというベースはあるものの、初期の波状文は中国磁器の劃花文の影響が予想される。この櫛目文と印花文による装飾から定型的な卸し目へという変遷は、非実用から実用へという通常とは逆の過程をたどったことになり、日本海側ですり鉢が急速に普及した理由とあわせて、なお検討の余地があろう。

### 珠洲窯跡群構成表



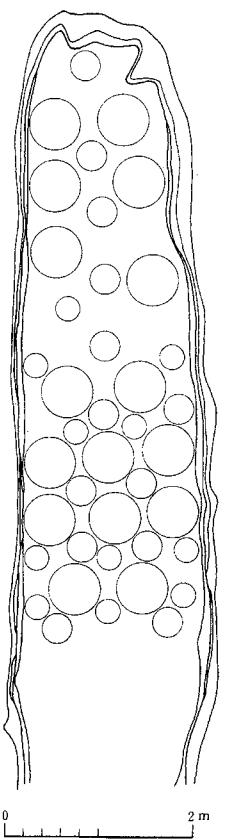
## すり鉢施文変遷

1 ~ 4 . 法住寺 2 号窯 5 . 馬縷窯 6 . 西方寺 3 号窯

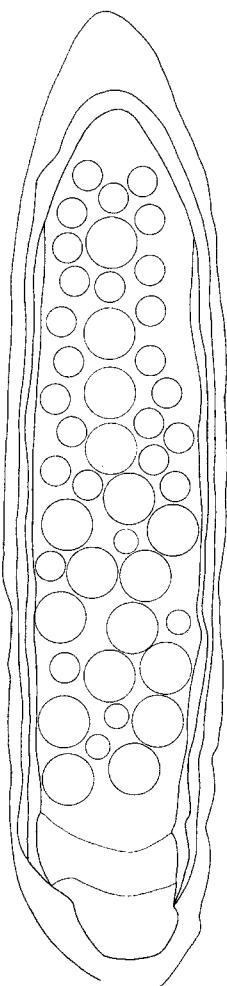


### 珠洲窯跡分布図

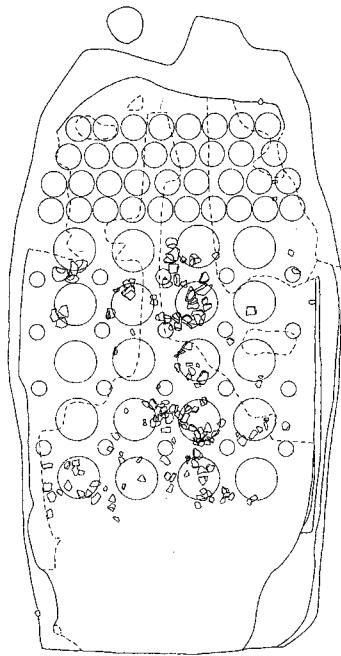
珠洲郡内浦町、鳳至郡柳田村、能都町は、平成17年3月1日合併し鳳珠郡能登町となっている。



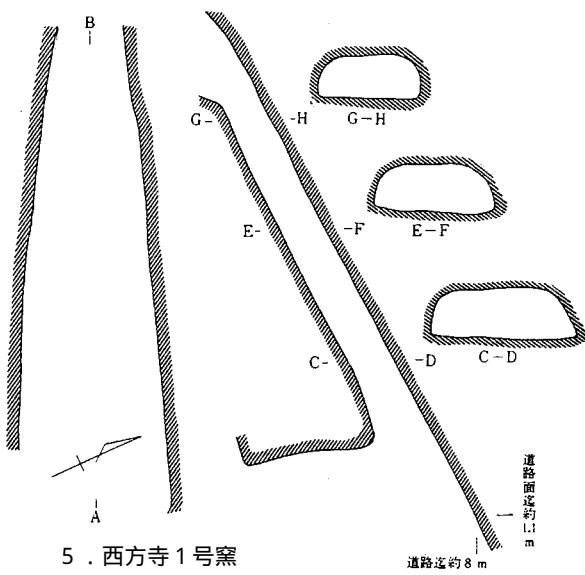
1. 寺家クロバタケ 3号窯



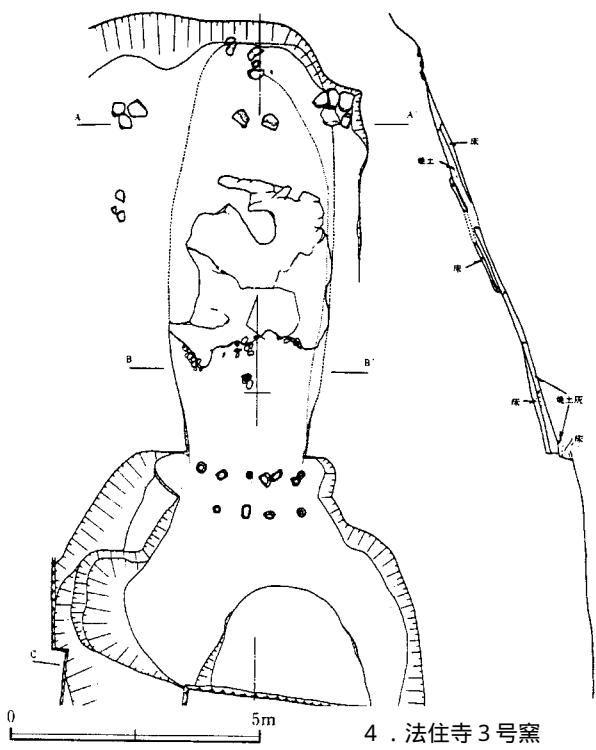
2. 寺家クロバタケ 1号窯



3. 大畠 2号窯



5. 西方寺 1号窯



4. 法住寺 3号窯